

# 偶然と自発

田 中 み どり

## 一

偶然を表す語に、タマ・タマタマ・タマサカがあり、これらは同根（タマ）であると思われる。上代では専らタマ・タマ・タマサカが使用されてゐるが、タマタマは訓読に用ゐられたものらしく、例へば中古の『源氏物語』でもタマサカ32例に対しタマタマ1例（源氏物語大成）を見るに過ぎない、など和文にはあまり見られない。偶然を表すタマ系の語は元来はタマサカであつて、その語源が忘れ去られタマサカ全体で偶然を表す語と受けとめられるやうになつた段階で、サカがヤカ・ラカと同類の語尾と考へられてタマが偶然を表す語根と見られるやうになり、副詞形の造語法の一である疊語の語構成によつてタマタマが派生し、更にタマが用ゐられるやうになつたものではないかと考へる。

タマサカはイササカと同様、語根タマ・イサに形状言接尾語サカ（ハサ十カ）がついたものであるとの説がある。形の上から見れば、これらは語末にサカを有ち、ヒソヤカのヤカないしはアキラカのラカなどと同類である如くに見える。（ただし、ヤカはそれだけで一語尾性が強いのに対し、ラカのラはカと結びつくよりなほ状態性を表

す語尾としてアキより分出したものと見られる。)がしかし、果たしてさうか。と言ふのも、上代語の状態性の語尾にサカがあつたとする確証が得られないからである。

語末にサカを有つ副詞語幹(一音一字)にはイササカ(「伊佐左可尔念而來之乎」萬葉19・四二〇一——塙書房、以下同)アラサカ(「安良佐賀乃賀味能彌佐氣」常陸國風土記香島郡——岩波日本古典文學大系)ムクサカ(「又四方食國年實豐<sup>爾</sup>牟俱佐加<sup>爾</sup>得在」續日本紀卷九・神龜元年二月——國史大系)などがある。イササカは、もしこの語根をイサとするならば、同根と見られるものは感動詞のイサしかなく、そこから「聊」の義に至るものは認めにくい。これは「伊佐左村竹(萬葉19・四二九一)」「伊佐佐目丹(萬葉7・一三五五)」などのイササに同じく語根はササで、ササラ・ササメク・ササヤク・ササヤカもそれよりの派生であつたらう。ササは微かな物音の擬声語であり微かな状態の擬態語であつたと思はれ、小さなもの・若いもの・新鮮なものを表す美称接頭語サ(サワラビ・サヲトメ)とも関連があると見られる。イササのイは「湯小竹(萬葉10・二三三六)」の例もある所から「斎」であると考えられてゐ、それは風に音立てる身近な植物(笹)の名がササと固定した上で「斎<sup>イササ</sup>」の概念が生じたものであつたらう。そして「斎<sup>イササ</sup>笹」のイが本来の意味を忘れられ接頭語化した上で、副詞語幹イササ・イササメ・イササカを生じたものであつたらう。即ちイササカはイササから語尾カの分出したものであつたと考へられる。イササカ・タマサカのサカはヤカ・ラカなどと同じく接尾語、サカを有つものとする説があるが、そこに掲げられた一方のイササカはササを語根としてをり、語末のサカを分離することは不可能の如く思はれる。また上代文献一音一字のもので語末にサカを有つ副詞には他にアラサカ・ムクサカがある。アラサカ(新栄)・ムクサカ(茂栄)ともにサカは「榮<sup>サカ</sup>」の原義を保つものと考へられ、同列には扱へないであらう。以上述べた所から、私は上代語の状態性の語尾としてサカ

(ハサ十カ)があつたとすることに疑問を有つのである。

タマサカはタとマサカ・タとマサないしタとマとを分離して語源を考へても、その場合タは接頭語といふことになるであらうが、そこから偶然の意を有つに至るべきものが考へにくい。少くともタマは一つづきの語であることは認めてよいであらう。問題はサ及びカが如何なるものであるか、即ちタマーサカであるのかタマ・サーカであるのかタマーサーカであるのかタマーサ・カであるのか、であるであらう。タマーサカであるとすればサカは例へばアラサカ・ムクサカの如くサカが一の概念を表すものである。タマ・サーカであるとすればサはタマの語尾、カは状態性の語尾である。タマーサーカであるとすればサはタマの副詞語尾、カは状態性の語尾、即ちラカ型である。

タマーサ・カであれば(一)サは状態性の語尾、カはサの語尾、ないし(二)カは状態性の語尾、サはカによる副詞構成に当たつて分出した語、即ちヤカ型である。このうちタマ・サーカは、例へばアキラカがアキラムの如き出自を同じくする語を有ち、ラはアキの語尾であるやうに、おそらくはタムよりの派生と考へられるタマス・タマサク・タマサス・タマサツ・タマサヌ・タマサフ・タマサム・タマサユ・タマサルなる一語動詞、ないしタマシ・タマサシなる形容詞、ないしタマサなる名詞その他の用例や類似表現もなく考へ難いものであり、またタマーサ・カの第一類はそのやうな副詞が考へ難いものであるので、この二者は考察の対象から外してよいものと思はれる。よつて考察の対象は、サカが実質的意味(例へばアラサカ・ムクサカの「榮」の如き)を有つてゐたか、あるいはヤカ・ラカに同じく状態性の語尾サカ(ハサ十カ)であつたか、の二点にしばらくはせられる。

ここでタマサカが、語尾サカ(ハサ十カ)によるものであるならば、これはそれとして他の諸々の語尾力を有つ副詞語幹と相似た性格を有することが期待される。そこで次に語尾力を有つ副詞語幹とタマサカとの関係について

考察する。

状態性の語尾カを有つ副詞は、ヤカ・ラカを有つものも含めて、その語根が名詞・用言の語幹ないし語根として、出自を同じくする語群と共にあることを常とする。ツヤヤカ・ツヤ、またアキラカ・アキラケシ・アキラム・アキラナリ、またアタタカ・アタタケシ・アタタム・アタタマル（名義抄）などのやうである（アキラケシ・アタタケシはアキラカ・アタタカよりの派生）。一方タマサカは、アキラカ・アタタカと同じ様に、タマサケシ・タマサム・タマサナリのやうな出自を同じくする語が考へにくい。サカを語尾と見る場合、一つの可能性としてはツヤヤカ・ツヤの如き対応のものとして名詞タマが考へられよう。しかし、考へ得る名詞タマ——玉・魂・靈——いづれも、ツヤヤカ・ツヤのやうな対応に於いては、偶然性を表すことにはなり難い。

次にアクセントについて見るならば、『類聚名義抄』では「偶 タマサカ（上上□□）」（観智院本、佛上一一）「偶 タマサカ（□平□□）」（同、佛上二八）の2例を見る。これらは同一文字であり、しかも採択された和語もほとんど相被ふ。

偶（佛上一一）

タマサカ タマ／＼ タグヒ トモ ヒトコロヘリ トモカラ

偶（佛上二八）

タマサカ タマ／＼ タグヒ ヒトコロヘリ トモ トモカラ アフ

にも関はらずアクセント表記に異同がある。『類聚名義抄』観智院本は図書寮本に較べ異同が多いのであるが、表Iに示した如く、語尾カを有つ副詞語幹は、ヤカ・ラカを有つものも含め、概ね「シヅカ」<sup>平上平</sup>「アキラカ」<sup>平平上平</sup>の型、即

ちカの前の音のみ上声であとは平声であると見てよいであらう。従つて、タマサカのサカが状態性の語尾であるとするならば、そのアクセントは「平平上平」であることが期待されることになる。観智院本佛上二八「偶（□平□□）」にその可能性が見られるが、完全な形の例は皆無である。一方タマタマのアクセントは「會 タマ／＼」（上上□□□）（観智院本、僧中二）「希 タマ／＼」（上上□□□）（同上、僧中五二）の2例を見、ともに「上上□□□」の型である。表Ⅱに示した如く、これも例外はあるのであるが、疊語より成る副詞は「マス／＼」、形容詞は「ヤキヤキ平平」を一般形とするもののやうである。「偶 タマサカ（上上□□□）」（観智院本、僧上一二）はこのタマタマ（上上□□□）に牽かれたものであつたかもしれない。いづれにせよ、数少い用例数ながら、タマサカが状態性の語尾サカないしカを有つ副詞語幹であるか否かを、アクセントの上から判定する根拠は認められない。

それよりも表Ⅰ・表Ⅱよりもとめ得る、語尾カ（ヤカ・ラカ）を有つ副詞語幹は「平上平」「平平上平」の型であり、疊語より成る副詞は「上上平平」・形容詞は「平平平平平」を一般形とする、といふことの方がより重要であらう。これに限らずアクセントは語根に左右されない。その品詞によつてアクセントの型が決定されることが多い。そしてまたそれは文の中で用ゐられる時様々に変化する可能性を有つが、この際は古辞書に表された語彙としての一一般のアクセント型である。それならば、タマサカなりタマタマなりの語源を考へる際にその歸された所の語とそれらとのアクセントがもし異つてゐても、それは問題にはならないであらうことが、ここに明らかであるであらう。

## 二一

偶然の「偶」の字は「遇」にも通じ、「陰陽・對合・胖合・適然」の意を表す（康熙字典）。「偶数」の偶であり

「配偶」の偶でもある。『新撰字鏡』はこれを「遇也合也類也會也値也」と記し、『類聚名義抄（観智院本）』は「タマサカ タマ／＼ タグヒ トモ ヒトコロヘリ トモカラ（佛上一）」「タマサカ タマ／＼ タグヒ ヒトコロヘリ トモ トモカラ アフ（佛上二八）」「アフ タマ／＼ タマサカニ メクル ワツカニ カヘリミル オモフク マイル（佛上五七）」と記してゐる。偶然・稀有・伴侶・希求・出会の義である。『類聚名義抄（観智院本）』にタマサカと訓む字は「偶」の他に「儻・遯・遯逅・挑」があり、タマタマと訓む字は他に「偶・儻・適・港・阿・祇・寓・會・希」がある（図書寮本はいづれも無し）。このうち「儻」は「トモカラ・トモ・ワツカニ」とも訓み、「遯逅」は「アフ」、「挑」は「メグル アフ」、「適」は「ワツカニ」、「會」は「アフ」とも訓んでをり、漢語の意義の巾と和語の意義の巾とが様々に交錯する中で、ある一致する点を思はせるものである。

源氏物語にあらはれたタマサカは、タマサカナリを原形とし語幹用法4例・連用形ナリ1例、ニ22例・終止形1例・連体形4例で、

- ・ たまさかの御せうそのかよひ（橋姫）
  - ・ たまさかに立ち出づるだにかく思ひの外なることを見るよ。（若紫）
  - ・ かくたまさかにあへるおやのけうせむの心あらば……（常夏）
  - ・ こなたの道にはかよふ人もいとたまさかなり。（手習）
  - ・ 久しきとだえもかうたまさかなる人とも思ひたらず。（帚木）
- などかかる言葉も様々で、いづれも「マレニ」に通じる稀有の意に用ゐられてゐ、現代語にも通ふであらう。これ

はタマタマの源氏物語唯一例、

・おぼえぬつみにあたりはべりてしらぬよにまどひはべりしをたま／＼おほやけにかずまへられたてまつりては……。  
(朝顔)

が偶然の意に用ゐられてゐるのとは、使ひ分けられてゐたものであるかもしれない。ここではタマサカは一義的に用ゐられてをり、『類聚名義抄』にタマサカと訓まれてゐる文字々々がタマサカと訓まれるに至つた経緯を説明するものは見られない。

上代のタマサカの用例には

・……海神の神の娘子に邂逅タマサカニい漕ぎ向かひ……(萬葉9・一七四〇)

・玉坂タマサカ吾が見し人をいかにあらむ依をもちてか亦一目見む(萬葉11・二三九六)

・情には忘れぬものを儼タマサカニ見ぬ日さまねく月を経にける(萬葉4・六五三)

・噫乎彼の父、邂逅(六万左加藤)兒有る家に次り、遂に是の子を得たり。(日本靈異記上巻第九——岩波日本古典

文學大系、以下同)

・比頃瞬不るが故に、吾戀ひ思ふ。何ぞ偶(多真佐可爾)今逢ふ。(日本靈異記中巻第一九)

・僧呼び求むるに、邂逅(タマサカニ)聞くこと得たり。(日本靈異記中巻第三十九)

がある。(萬葉集は一音一字の例はないが、冒頭に述べた如くタマタマは訓読に用ゐられたものらしく和文ではタマサカが用ゐられたと見られること、及び日本靈異記の和訓よりの推測により、これらをタマサカと訓む説に従ふ。)ここに見られる如く、上代ではタマサカはタマサカニの形のみを見る。そしてそれは、時間としては「今」・

場所としては「ここ」に限定されてをり、直接体験、就中「会フ、見ル、向カフ」などにかかることを本来とするもののやうである。他の語にかかるものも、その場面に直面するといふことを基に有つてをり、なほこれらの語を基柢とする上に成り立つてゐると見てよいであらう。

さらに日本靈異記に「儻」は「加多知波比（上巻第五）」「多牟良止之天（上巻第十七）」「戸牟良（下巻第二十四）」とも訓まれてゐる。『類聚名義抄（観智院本）』に「タマサカ」「タマ／＼」と訓む「偶」「儻」を「トモ」「トモガラ」とも訓み、また「儻」を「カタチハヒ」と訓むことも考へ合はされよう。元来漢語の「偶」「儻」が偶然の意と配偶・伴侶の意とを有つてゐたことが、和語のその意を表すタマサカ・タマタマとトモ・トモガラとに結びつけられることになつたものと見られる。

タマサカは直接体験、就中「会フ、見ル、向カフ」即ち「情ニ忘レヌ」のみならず直接「アフ」ことをもとにしてゐる。それは経験界に於ける偶然性が「二つ或は二つ以上の因果系列の交叉點に存するもので『ここといま』に成立するものである」（九鬼周造『偶然性の問題』P168）ことに拠る。『類聚名義抄（観智院本）』に「會」を「アフミルムカフ」と訓む一方「タマ／＼」とも訓むことも参考にならう。

而して漢語の「偶」「儻」が偶然の意と配偶・伴侶の意とを合はせ有つてゐるやうに、和語のタマサカ・タマタマとトモ・トモガラともその出自を同じくするものと考へられる。偶然とは「独立なる三元の邂逅」（九鬼周造、上掲書P148）であり、配偶・伴侶とは「邂逅した相手」であるから、元来二者は乖離した概念ではない。「相手」の「相」アヒ自体、アフ出自と見られ、これも出会・邂逅をもとする語であらう。

ところで、萬葉集に「魂アフ（相・会・合）」といふことがある。



・筑波嶺のをてもこのもに守部すゑ母い守れども多麻曾阿比尔家留魂そ会ひにける（14・三三九三）

・魂合へば靈合者相寝るものを小山田の鹿猪田守るごと母し守らすも（12・三〇〇〇）

・……もののふの八十の心を天地に思ひ足らはし玉相者君来ますやと我が嘆く八尺の嘆き……（13・三二七六）  
魂相はば

全三例、伴を求む心をタマと呼び、タマの合ふこと即ち感応が伴との出会の契機となつてゐる、とよみとれる。ト

ム（尋・求）心をタマ（魂）と呼び、トメて合ひ得た相手をトモ・ツマと呼んだ、即ちタマ（魂）はトム（尋・求）と同語源で、トモ（伴・友）・ツマ（伴）に意義の分化をみるものであつたらう。

人は袖振り合ひ鼻つき合はせても相手の存在に気づかぬことがある。真の出会とは、両者の求める心が一致する所に成就を見る。「魂アヒ」とは即ち感応である。それは求めて必ず得られるものではなく、偶々・唐突に直感されるものである。感応とはしかしながら恣意的なものではない。生来の性質・生活環境などの様々の要因が個人をつくり、個々人は潜在的に求めるものを有ち、個々人にみあつた出会が期の熟した時、齎される。またそれは他者と出会ふ以上は一方的なものではない。出会は両々相待つ所、相待に於いて勝義のものとなる。そしてそれ（相待）を意識するにせよせざるにせよ、時間の流れの中のある瞬間・空間の広がりの中のある地点に於いて両者が交はることがある、それはは出会・邂逅と名付けるのである。それはかくすればかくなるといふ如き必然的なものではない。また出会つてゐながら気づかず後になつてすれ違ひに気づくことすらある。無明なる人間にとつて魂と魂との出会・即ち伴の発見は偶然のこととして、また出会つたことは稀なるできごととして、驚きをもつて感じられる。タマサカといひタマタマといふは、タマアフを経過し、かかるタマとタマとの出会の偶然性・稀有性を表した言葉であつたであらう。

三

ところでタマサカは偶然性を言ふといふ時、先にも述べた如くそこに「いま」「ここに」といふ時間・空間の概念が入ってくるであらう。それならばサカは時間・空間に関する語であつたのではなかつたか。空間的な場所を表す語に「於<sup>オ</sup>久可<sup>カ</sup>（萬葉17・三八九七）」「乎<sup>ツ</sup>可<sup>カ</sup>（萬葉20・四四〇八）」などのカ（処）があり、時間を表す語の中に「麻<sup>マ</sup>左可<sup>サカ</sup>（萬葉18・四〇八八）」がある。

現在<sup>マダカ</sup>は時間・空間的には「いま、ここに」である。ものの存在（これ）は「見る」といふ行為を通して「在り」と確められる。上代の人のものの見方は語彙「見る」に要約されるやうな外面的なものの存在と密接につながつてゐた故に、現在の時を表す場合にも「見る」ことが主軸を為すことがあつた。イマのマ・マサカ<sup>マ</sup>のマ、いづれも「目<sup>メ</sup>」にかかはる語である。『類聚名義抄』（観智院本）に「見」を「ミル ミユ イマ イチシルシ アラハル アラハス」、「今」を「イマ コレ」、「現」を「アラハス アラハル ミル イチシルシ」、「時」を「トキコレ コノ ココニ イマ ミル ツフサニ アキラカ」と訓むのも、そのあらはれである。目に見る・目のあたり見るその時、ものは視界の内<sup>ウチ</sup>に在る。それは「これ」と指し示すことができ、空間的には「ここ」、時間的には「いま」と限定されよう。マサカはその間の事情を語る語であると見られる。岩波古典文學大系『萬葉集三』12・二九六頭注はマサカを「目前の意」とする。「前」は場所を表す形式副詞であり、これは右に述べた「視界の内」といふことと同旨である。ただし、マサカが「目前の意」であるとする時重要なのは、かかる「前」が「空間的な場所」の意であるといふことであつて、サカの語源を「前<sup>サキ</sup>」にもとめて「目<sup>メ</sup>前<sup>サキ</sup>ノ轉」とする（『大言海』）といふことでは

ない。サカの語源は「前<sup>サキ</sup>」と語源を同じくする「界<sup>サカイ</sup>」であつたであらう。

「前<sup>サキ</sup>」「界<sup>サカイ</sup>」はともにサク「裂・割・切・拆・開」（『名義抄』）の名詞形である。開闢とは天地が裂け開くことであり、花が咲くことを花が開くとも言ふやうに、サクはヒラクと相被ふ概念を有つ。そしてサク・ヒラクその先端をサキといふ。また、サク・ヒラクのものの開いた状態といふ点に価値が置かれれば、サカユ（榮）・サカル、サカリ（盛）・サキ（幸）などの概念とならう。一方、サクことはものの分離（サク）をきたすことになり、分離された二者の間には断絶ないし間隙ができる。それがサカないしサカヒ「界・邊・區・境・場」ハサカフ「間」（『名義抄』）であつて、空間と空間とを区切る線・その周辺・区切られた空間全体をさす語である。

奄美方言に「坂<sup>サカ</sup>」のことをピラといふ由（山田実『南島方言与論語彙』P4）。奄美で「開く」はヒラクでピラクとは言つてゐない（藤山ヒロ子氏御教示）やうであるが、ハ行をバ行に発音することの多い現存奄美方言の音韻現象にかんがみれば、ピラハピラク（開）は十分考へ得よう。なほ奄美方言で「急でない平らになつた坂」をピラサカと言ふといふ（山田実・上掲書P4）が、この場合ピラは「平<sup>タビラ</sup>」の意義を合はせ持つてあよう。

記紀に言ふ「黄泉平坂」とは現実界と黄泉界とを隔てる境であつた。「黄泉比良坂之坂<sup>山坂</sup>本」（記上）の表現もある如く、それは斜面を想定したものであつたと見られる。が、本来坂は「あしひきの山坂<sup>山坂</sup>越えて天離る鄙に下り来」（萬葉17・三九六二）「あしひきの山坂<sup>山坂</sup>越えて行き変はる年の緒長くしなぞかる越にし住めば」（萬葉19・四一五四）から類推されるであらうやうに、山の頂点<sup>山頂</sup>ないし分水嶺<sup>分水嶺</sup>を指したはづである。「越ゆ」とは、それが山である場合、頂点・分水嶺を通過して向かう側に行くことであるからである。『類聚名義抄（観智院本）』に「陞」を「ミネサカ」、『倭玉篇篇目次第』に「嶺」を「ミネサカ イタ、キ」「陞」を「ミネサカ」、『倭玉篇夢梅本』に

「嶺」を「阪也或作陁」<sup>ミナト</sup>「陁」を「阪也与嶺同」<sup>ミナト</sup>と訓むことも参考にならう。頂点・分水嶺が境<sup>サカヒ・ミナト</sup>であり得るのはそこで視界・世界が区切られるからである。そしてそのサカが山を越えるにあたつて道となるべき所、ないし上界と下界とを区切るもの（斜面）を表すことになつていつたものであらう。「高胸坂」<sup>タカムネザカ</sup>（記上）のサカも同様胸の頂点ないし盛り上がった斜面であると思はれる。してみれば、「坂」は「界」<sup>サカ</sup>によるものであつて、また、上述の「サカ・ヒラクは相被ふ」といふ所からサカを考へたことは無理ではなかつたことが証されよう。

サカは自然界にとどまるのみならず、磐境<sup>イハサカイ</sup>の如く神境を区切るものないし区境として人間が起こし樹てることのできるものでもある。また海界<sup>ウミサカイ</sup>・泉津平坂<sup>イハサカイ</sup>は現実界と常世界・黄泉界とを区切るもの、（黄泉乃界<sup>ヨミノサカイ</sup>——萬葉9・一八〇四——は区境）であり、意識界のものにも想定される。上代語にはかやうな意義（境・界）を有つサカが存在する。そしてこれ（界）が、目の前・視界の内を意味するマサカのサカであると考へられる。

以上の如くマサカは視界の内といふ空間的な場所の義を有つべき語構成より成つた語であるが、それが前にも述べた如き「見る」といふ行為の時間性——現在を表す語に転換したものである。

而して、偶然性を表した語タマサカもまた同様の語構成により成つた語であると考へられる。即ち、現の物理的な場所でもなく情の場所でもなく、人と人が出会ふ場所が、魂の場所タマサカである、と見ることができであらう。タマサカは上代に於いてはタマサカニの形のみ有り、「見ル 会フ 向カフ」などにかかつた。「タマサカニ見ル」といふ時、「ニ」は「ニ於イテ」の意の位格の格助詞である。

マサカも現在、タマサカも現在であるが、サカ自体にその意味があるのではない、マサカの場合にはマにそれ

があり、タマサカの場合にはその全体の有つ意味内容（邂逅——偶然）の時間性からでてくるものである、といふことは述べるまでもないことながら付言しておく。

前の用例に見る如く、「タマサカニ見ル」は偶然の出会いの僥倖に際して用ゐられる表現であつた（康熙字典「黨（五被傳）黨可以徼幸」とも通ふであらう）。タマとタマとの出会いは、唯に会ふのみならず情に念ふのみならず、相手を求める心の出会いであるが、直接に会つた上にて魂の場所で出会ふことの偶然・稀有なるが故に、「タマサカニ見ル」は「稀に邂逅する」「偶然、出會フ」の意となり、タマサカニは偶然を表す副詞となつていつたものである、と考へる。（「タマサカニ見ル、會フ、向カフ」などが「タマサカニ聞ク」などの基柢ともなることは、前に述べた。）

タマサカが一面やはり出會そのことに関はるものであるに對し、同じくタマアフを經過したと考へられるタマタマは、その語形の成立する時既に副詞である所から、出會の偶然性・稀有性をのみ意味する言葉であつたであらう。『大般若經字抄』（汲古書院『古辭書音義集成』）に

遇中毒箭遇者邂逅タマサカス或云偶也タマ、又如前訓二訓大意雖同非无小異隨家可用敷此文可讀邂逅之訓自余雖无難通用以邂逅可爲正但偶字以儼爲常說也

（但、タマサカス、は、タマタマと比すことのできるものであるならば副詞であるから、これはタマサカニであらう。——筆者）

と記し、また『類聚名義抄』に於いて「邂逅」は「タマサカ」「邂逅」は「タマサカ アフ」の訓に限られてゐることとは、タマサカがタマタマやマレと同義を有ちつつ、なほ出會といふことに重きを置く語であつたことを示し

てあるものであらう。

#### 四

以上、タマサカは魂の界に於いて二者が邂逅することであり、またそれが偶然・稀有なものである所から偶然性・稀有性を表す語となつたことを述べた。偶然性は相待的な観点に於いてはじめて説明し得るものであるが、それはまた、國語の態、とくには認識の根源に關する自発の助動詞を説明することのできる地平でもある。國語の自発を表す助動詞と可能を表す助動詞・受身を表す助動詞とはその語形（ゆ・らゆ、る・らる、れる・られる）を同じくし、文法的にも相似た構造を有つてゐる。ところで、「見る」といふ行為は目でもつて存在を「在り」と確かめることであるが、それは外的なものごとを対象とする一方、内的な判断を対象とすることもあり、人間の認識を表す基底的な語と見ることができであらう。故に、以下「見る」を中心にして、自発・可能・受身の助動詞を考察する。現代語では、「見る」の受身形・可能形は「見られる」自発形は「見える」で、自発は既に一語化してゐるが、古い時代には自発・可能・受身は全て同形で、これも全て「見ゆ」であつたらうことが推測される。以下、現代語によつて論を進めるが、このことをも念頭に置いて考へるのである。

「見る——見られる」は文法的には能動・受動と称される。私が花を見、花が私に見られてゐるといふこの現実には、いま・ここに成立してゐる。花は「見られる」現実とは反対に「見られず」という非現実にも置かれ得る、私は「見る」現実の反対に「見ず」といふ非現実をとることもあり得たはずである。また、それが犬でもあり得山でもあり得たにも関はらず、私が今見てゐるものは花である。それならば「見る」といふ動作は、一の可能態の現実

化といふことである。可能は不可能と対を為すが、國語に於いては、可能「見られる」の矛盾概念の不可能は「見えず」の如く、自発態「見える」の否定でもつて表される。可能の否定「見られず」がなほあれかこれかの選択にとどまる現実性をも有するのに対し、自発の否定「見えず」は徹底して非現実を表す。自発「見える」の「見る」主体はほとんど常に一人称「私」であつて、その故に、それと表現されないことが多い。このことは自発が人間の認識の原初に關はつてゐることを思はしむるであらう。

上代語に於いて自発の助動詞「ゆ」が承接する語は、「見る」「聞く」「思ふ」「偲ふ」「忘る」に限られてゐる。これらは全て人間の認識に關はる語である。

・潮瀬の波折を彌<sup>見れば</sup>黎<sup>見ゆ</sup>麼遊び来る鮪が鰯手に妻立てり彌<sup>見ゆ</sup>喻（日本書紀八七歌謠——岩波日本古典文學大系）

は見ようとしたのは「潮瀬の波折」であつて、見ようと意図してゐたわけではなかつた「遊び来る鮪が鰯手に妻立つ」様が、その時偶然・唐突に目に入つて来た、そして私の目にその様が鮮かに映じ私はその様に心を奪はれた、と言ふ。「見える」といふのは何かを「見る」ことを意識せずして見た時、偶然・唐突に目に入つて来てそのものの存在に気づくことである。

・田子の浦ゆうち出でて見者ま白にそ富士の高嶺に雪は降りける（萬葉3・三一八）

は「見ゆ」を表出してゐない。が、富士に今雪が降つてゐることは予期してゐなかつた、にも関はず雪が降つてゐる光景にぶつかり、驚き心打たれて立ち尽くしている人の様が、ありありと描き出されてゐる。「見ゆ」は表出されてゐないが、これも前の「S-I-Pが見える」の延長上にあるものと解されよう。（萬葉集自然詠の特質はここに在る。また、萬葉の「見る」は、外的なもの、の存在を通して、そのものの内的な生命力（靈）をも見透すことであ

る。それに会ふことが萬葉の「見ゆ」であるであらう。）

発見は驚愕を伴つてそのものの存在を吾々に刻みつける。無から有が突出することが自発——偶然の意味である。存在はその時不可能から可能へ、非現実から現実へと向かふ。自発態が可能態と語形を同じくし、常に可能の意を含むのも、それが現実——非現実・可能——不可能・偶然——必然をその意味の内実としてゐることに拠る。吾々が「花」を「見る」と言ふ時、かかる自発（見える）を経過した可能態の現実化（見られる）、換言すれば、不可能（見えず）の無から偶然的に可能（見られる）の有に現成した存在としての「花」と「私」との二者が今ここに会つてゐる（見える）といふことが表はされてゐるのであることが認められるであらう。その時「私」は「花」を「見」、「花」は「私」に「見られる」のである。ここに至つて漸く認識は反省的・自覺的なものとなる。國語の認識の基盤には、かかる自発・可能を経過した「我」と「汝」との出会——相待といふことが、言語の形にまでなつて存在する。概念の措定・主語に述語づけること・言語すること・思考すること自体、その原初に他者との出会を語るものであり、この境位に於いてはじめて吾々は他者を見、他者の在り様を判断し、他者と関はり有つことができるものであらう。

なほ、中古以後の尊敬の助動詞が受身の助動詞・使役の助動詞と形を同じくすることは、それらが二者の関はりを前提とし、それを表面にうち立てるものである所から、語形を同じくし（おそらくは受身・使役から尊敬に転化した）、文法構造に共通性を有つものであるが、これは、相待的な人間関係といふ現実の言語場に積極的に関はり、相手を重んじる行為に出でるといふことを、言表するものである。他者と相対立するのみの所に愛はない、対立する他者と相待つ所にしてはじめて敬語は存する。



存在とは何か、何故にものは存在するのか、人は何故生きなければならないのか——罪をも犯しながら、そして存在には何故限りがあるのか。答はわからない。しかし吾々は現に生まれ、限られた生を生き、死ぬ。厳然たる事實の前に吾々は茫然と立ち尽くす。存在は非存と背中合はせに在る。かやうな虚無思想にも陥りさうな危い中で、人は存在に意味を見出ださうとする。非在は存在の矛盾概念である限り、それも存在と同じく有の範圍の事柄である。それならば、存在と非在との有を成り立たせるものは、有の否定、非有との関連に於いて考へられる。ここでもしも非有が有と対立するものとして考へられるならば、それは有の *Antithese* として問題を逆戻りさせるだけのものとなる。存在の範圍のものである言語をもつてして存在の根拠を語るとすれば、それは唯「非ず」といふ否定形のみ漸く言證し得るだけの、場所的なるものでなければならぬ、と謂はれる。非有とは有を成り立たしめるべく有を包んであるもの、そこから有が照り返されてくるべきもの、そして真偽善惡美醜が照り返されてくるべきものでなければならぬであらう。ここに、真偽善惡美醜は人間的な価値基準である。人間が存在せずともものは存在する、といふ立場もある。だが、「あり、あらず」といふ判断・思考は言語によつて行はれる。ものごとを判断するといふことは、概念として措定された「がある」存在を「である」と述語づけて判断し、判断することによつて存在「がある」の根源に至らうとするものである。それは論理上、究極的には「花は花である」なる同一律に還元される。それは、論理的には花自身の自己同一を述べ、認識的には私に見られた花自身の存在と存在の有り様を述べる。だが、ひとがかかる判断を為す時既に、主語の「花」は、言語者「私」に出会はれた他者として、「私」と

関はりを有つてゐる。しかるに「花」が唯客観的対象として在るものであるならば、かかる判断は判断する主体「私」を根拠とする処に成立するものとなり、より究極的な同一律「私は私である」を要請せざるを得ないものとなる。「私は私である。」から出て来るものは唯「私」しかない。ここでは他者も私あつての他者でしかなく、他者は私にとつて対象であるの外なくなる。他者もまた「私は私である」として「私」を対象化する。作用は唯に私から他者へといふ一方向にのみ、対立する両者から発されるのみである。さうではなく、「花」は「私」をも含んだ抽象的一般形であるといふのであるならば、「私」は特殊なものと化し、従つて判断する主体はものであるといふことになり、即ち「吾思ふ、故に吾在り」といふ觀念論の根本原理は覆されるものとなる。ものが根拠であると言ふならば、判断するといふこと即ち言語するといふことは如何なることであるのか。「ものを根拠とする。」という判断自体、どこからもとめられ思索し得るのか。思索し判断することもなくなつてはじめて吾々はものであり得る。喜びも悲しみも精神的なるものは全て余計な付加物として捨象しなければならぬ。それを根柢に置いてはじめて唯物論は全きものとなり、吾々は唯物的に存在することができであらう。吾々はこのいづれをも肯ふことはできないであらう。——ここで同一律を検討し直してみよう。

「花は花である。」は「花」の自己同一的存在を述べる。それは唯に「花」の分析にとどまるのみではない。その時判断する「私」が存してはじめて、かかる言説は為し得る。ところで言説とは何か。花に「花」と命名し「花は花である。」と判断するといふことは、同時に「私は私である。」より成る「私」の存在を言ふものであり、またこの時「私」は他のものではない、「花」に就いて言説してゐる。判断する主体はあくまでも「私」である。その「私」が「花」に就いて判断を為さうとする時、「私」はその「花」を見、「花」は「私」に見られてゐる（ここに、「見

る」とは「内面的に」の意である。念の爲、付言する。その時「花」も「私」を見、「私」も「花」に見られてゐる、と言ふのは詩的表現に過ぎようが、少くとも、今「私」が見てゐるのは「花」であつて其他のものではない、と言ふことはできる。「私」は今「花」に関はつてゐる。この「花」は唯に「私」の意識の對象であるのみならず、それ自身自らの在り様を有つた所の他者である。自らの在り様を有つて存在する花と自らの在り様を有つて存在する私とは、「私」が花を「花」と命名し「花は花である。」と判断する時「関はり」を有つ。この時作用は「見る」といふ私から他者への一方向（交互的であるにせよ）にのみ存するのではなく、「見る」といふ私から他者への作用が存すると同時に「見られる」といふ他者から私への反作用が存する。他者を見るといふことは、他者の存在に氣づくこと、他者との間に「関はり」を有つといふことに外ならない。他者を「對象」といふ言葉で把へる時にも、この意味での他者として見るといふことでなければならぬであらう。言説は唯に論理の爲に在るのでもなく、認識の爲に在るのでもなく、人間のものとひとひととの間に於いて行はれるものでもある。そしてそれは言語にとつて重要な要件である。文法が言語を考察するものである上は、この要件を是非とも根柢に据ゑねばならないであらう。

もし他者との「関はり」を捨象するのであるならば、吾々は表現をなくするの外ないであらう。そしてそれは自ら死を選ぶことによつて得られるのかどうかも定かではない。自ら死を選ぶといふこと自体、一の表現とも見得るからである。

六

時間の流れ・空間の広がりの中のある瞬間・ある地点に於いて、独立した存在を営む二者の軌跡が交はることがある、それをは出會と名付ける。氣象・人事、會ふことも會はないことも全て偶然である。それを必然と呼ぶことができるのはひとり絶対者——神のみであらう。存在が偶然であるが上に更にに出會は偶然・稀有なものである。そしてその出會が人に「存在」の意味を問ひかけ、偶然の裏にある必然に思ひを致さしめるまでのものである時、それを眞の出會、即ち根源的な地平に於いての出會、と呼ぶことができるであらう。

人は生涯のうちに多くの他者とゆき過ぎすれ違ふであらう。しかしながら袖振り合ひ鼻つき合はせながら相手の存在に気づかず看過することは多い。恰も紛失物を捜す人がその他のものには目もくれぬ如く。人は目によつてもを見ない、心によつてもを見る。その相手が紛失物の如く明確である場合にも、また尋ね求めてゐるといふ意識すらも定かでない場合にも。「人は邂逅する時己れ自身に出會ふ」といふ逆説はかかる事情を説明するであらう。そして発見は常に驚愕の感を吾々に齎し、僥倖の念を想ひ起こさしむる。

たまさか——この語が用ゐられるのは全て偶然性の僥倖に際してである。たまたまが偶然性一般に用ゐられるのとそれは領する所が異なる。人間の生そのものが偶然的なものであり、人間の行為・思惟も偶然的なものである。存在とは偶然的なるものの名である。その中に於いて、人が久遠の彼方よりの光を見る時、それは人の心に喜びとして立ち現れる。ひらめきは、久遠の、瞬間への現成である。人間が唯に己れの理想に向かつて、それを求めてつき進むのみであるならば、理想とは自我意識の別名でしかない。人が眞実の理想を求めるならば、そこにものならぬ

ひと、他者を待たねばならず、他者との出会を齎し得るのはひとり空性即縁起の如性に外ならぬ。世俗とは勝義に無意識なることであるが、その世俗に於いて相待を知ることが、裏に勝義を感じさせるものとなる。人が相待を知るといふことこそ、邂逅の意味である。驚愕・僥倖の感情をそれが齎すのも、そこに存在の交叉があり、存在が意識されることに由るからである。存在が意識されること、即ち他者を見出だすこと、自己を見出だすこと、関わりを見出だすこと——それが相待に外ならないであらう。

ゆき過ぎすれ違ふことのできるものと・ひととは限られてゐる。限られてゐる内にも、人はそこに深甚なるものを見出だすこともあるのである。が、遭うてもそこに意味を認め得ないものと・ひと、袖振り合うて空しく過ぎてゆくことの方がむしろ多いであらう。「私はこれを求めてゐたのだつた。」その直観が外れることもある。後に色あせ、その直観をも無みしてしまふこともあらう。ところで、この直観といふものは、初めに在るものではない。そのものを現在に把持し、これだと思ふ、といふものでしかあり得ない。神秘的とそれを呼ぶことも可能である。しかしそれを単に「神秘的」と拉し去る所に、人間の生の根柢は窺ひ得ないであらう。人間は明なるもので、存在は絶対肯定される必然的なものである（あるいは否定と言ふのもその裏返しである）、と思ふ所に人間はあり得ない。そこでは他者は、また自己も、ものでしかなく、自己の目的の対象でしかない。かやうな生にとつて死は終焉でしかなく、生きたことの意味も死によつて風化するものとなる。そこには個々単一の存在の期間しかなく、個人の存在期間が区々に積み重ねられた所で、それは変遷しか生み出しはしまい。文化が歴史が考へられるならば、そこには必ずひとが存在しなければならぬ。ひとが存在するとは、人と人とが相共に、生きるといふことでなければならぬ。人と人との関はりの積み重ねは、ものの集積が量にすぎぬものであつたに對し、質に轉換する可能性を

秘める。たゞそれも、可能性を秘めるとしか言ひ得ない仕方ではあるが、そこに向上を目指す契機だけはある。何が向上となるか、何が真であり、善であり、美であるのかはわからぬ。しかし、過去・現在のある人・あるものごとに出会ふ時、人がそれに思ひを致す結果となるひらめきは、「神秘」の名で拉し去られるべきものではない。そしてそれを未だ来たらざる時に向かつて語りかけることだけが、人間の向上への志向である。

出会はずにその時点での僥倖に了はるならば空しいと言はねばならぬ。そこに相待が顧られ、称名が再び人と人との間に還つて来て人と人との応答となり、人と人々が彼岸につつまれて存在し合ひ、人々が互ひを慈しみの心でみつめ、思ひやりの心で接することのできる事が、人間関係をひらくものとなり、その時僥倖は未来を拓くものとして、はじめて歴史的となり得るであらう。

(参考)

『類聚名義抄』(圖書寮本・観智院本)に於ける語末にカを有つ副詞(表Ⅰ)・疊語(表Ⅱ)のアクセントは左の如くである。

但、副詞・疊語の下に数字は名義抄記載総数、アクセントの下に数字は用例数、□はアクセント無表記、※は表記されているが不明、を示すものとする。

〈表Ⅰ〉

A、圖書寮本		
アキラカ	6	平平上平 5 不明 1
アタタカ	2	平平上平 2
オロソカ	1	平平上平 1



ユタカ

3

平上平 2

平上 □ 1

B、観智院本

アラヤカ

2

平平平 □ 1

平平上 □ 1

アカラカ

1

平平 □ □ 1

アキラカ

133

平平上平 12

平平上 □ 13

平平 □ □ 21

平 □ 上平 1

平上上 □ 1

平上 □ □ 1

□ 平上 □ 1

cf. アキラケシ

2

平平平 □ □ 1

□ □ 上 □ 1

平平 ※ ※ 1

cf. アキラム

1

平平上 □ 1

アサハヤカ

4

平平 □ □ 1

アサヤカ

15

平平上平 2

平平 □ □ 4

□ 平 □ □ 1

アタタカ

15

平平上平 3

平上 □ □ 2

平平 □ □ 3

平 ※ 平平 □ 1

cf. アタタマル

1

平平上平 □ 1

cf. アタタム

1

※ 平平平 1

アテヤカ

1

アナフカ

1

イササカ

7

平平 □ □ 2

イヨヨカ

3

ウクヤカ

1

ウヤヒヤカ

1

オゴソカ

2

平平上平 1

オソヨカ

1

オダヒカ

2

平平上平 2





ツハヒラカ	21	平	平	平	上	平	3	平	平	□	□	□	□	4	上	平	平	□	□	□	□	1
ツハラカ	1	平	平	平	上	平	3	平	平	□	□	□	□	4	上	平	平	□	□	□	□	2
ツマヒラカ	10	平	平	平	上	2	上	上	平	上	1	平	平	□	□	1						
ツヤヤカ	3																					
テリアキラカ	1																					
ナコヤカ	1																					
ナタラカ	6	平	平	上	平	1	平	平	□	□	1											
ナハヤカ	1																					
ナヒヤカ	1	平	上	□	□	1																
ナメラカ	1	平	平	□	□	1																
ナヨヨカ	2																					
ナララカ	1																					
ニギラカ	2	平	平	上	平	1	平	平	平	□	1											
ニハカ	43	平	上	平	6	平	上	□	4	平	上	上	1	平	平	平	1					
ハタダカ	1																					
ハツカ	1																					
ハナヤカ	2																					
ハルカ	66	平	上	平	4	平	上	□	4	平	平	□	2	上	上	平	3	上	上	上	1	上
ヒスカ	1																					□
ヒスカワザ	1																					□
ヒソカ	28	平	上	平	3	平	上	□	5													□
ヒソカコト	2																					□
ヒヤカ	1	平	上	□	1																	□

[illegible]

ユルルカ	1
ヨヨカ	1
ワツカ	21
	平上平 2
	平上□ 2
	平□□ 1

〈表Ⅱ〉

A、圖書寮本

イメく	1	上上平平 1
イヨく	1	平上平平 1
ツラく	1	上上平平 2
マスく	4	平上□□ 1
ヤウく	1	上上□□ 2

クダくシ	1	平平□□□ 1
コトくク	2	上上平平平 2
セハくシ	1	平平平□□ 1
ヤキくシ	1	平平平平平 1

B、観智院本

アラく	3	平上□□□ 1
イヤく	1	平上□□□ 1
ヲチく	1	上上□□□ 1
オノく	1	平上□□□ 1

[illegible]



フクくシ	3	平平□□平1
ヤウくシ	1	
ヤツくシ	1	平平□□□1
ユビくシ	1	

註

- ① 築島裕氏『平安時代の漢文訓読語についての研究』P 48くP 485にもこの記述がある。  
 ② 阪倉篤義氏『語構成の研究』P 362。  
 ③ ④ 森重敏先生『日本文法通論』P 154くP 159。

(一九七八・一一・三〇)

